

「しょうがない」と自己の人生を受け止めて生きる

- 壮年期に発症した脳血管障害者夫婦でつくる語りから -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
初鳥 日美

医療では様々な専門職が存在し、患者への治療に携わっている。医療の現場は科学的な治療のみでは成り立たず、人と人が接する場である。その中で作業療法は、生活を援助する専門職種であり、対人援助職者として、対象者が病いを抱えた存在であることを理解する必要がある。本研究では、壮年期（40歳～50歳代）に脳血管障害を発症した男性と妻の語りを通して、脳血管障害者がどのような生活世界に存在し、どのように障害を意味づけているのかを調査し、リハビリテーションにおける援助の在り方を検討した。

方法は、夫婦同席（1名は除く）で、共同ナラティブ・インタビューを行った。インタビュー結果は時系列の中で障害の意味づけに影響する要因や環境を内容ごとにカテゴリーをつけて整理した。そして、それらを元にそれぞれのライフストーリーを作成した。5名の対象者から、共通のパターンが見られた3名を今回の分析対象とした。

夫婦でつくる語りにより、従来の障害による「絶望」から「新たな自己」を再獲得する過程とは異なる姿があった。対象者は障害を諦めでも居直りでもなく、肯定的な意味を含めた「しょうがない」と語っている。対象者の語る「しょうがない」は、体験や妻との関係の中から語られ、障害を様々な意味づける過程が浮かび上がった。ライフストーリーの中の「しょうがない」を分析すると、「自業自得」、「考えてもしょうがない」、「出来ないものはしょうがない」、「前向きな姿勢」という意味づけが含まれていた。この「しょうがない」には、自分の生き方から障害を意味づけたり、時間を戻せないことから現在を意味づけたり、身体に起こった障害を自然なこととして意味づけたり、新たな人生ステージのきっかけとして障害を意味づけたりするなど多様な姿が浮かび上がった。障害受容は、一言で語られるものではなく、人は障害を様々な視点で意味づけているということが分かった。障害受容ができていないのではなく、多様な意味づけの過程が重要であることが分かった。そして、その意味づける過程において、文化が背景として存在し、社会の中での生き方、会社での働き方、夫婦の関係のあり方に影響を与えていた。この社会や夫婦の関係の中で、障害が多様に意味づけられていた。特に、夫婦の相互交流の中で、肯定的な意味づけへと物語が構築されていた。

本研究を通して、障害はその時代の中での生き方や夫婦の関係の相互作用の中で意味づけが行われていた。医療の視点のみで対象を理解するのではなく、このような病いの体験を知ることを通して、今後の医療の現場や援助者の育成においても、社会や時代背景、それぞれの関係の中での相互作用が障害の意味づけに影響することを理解し、対象者のみならず妻などの周囲との関係を含めた援助を行う必要がある。